

< 2 学年 >

1 学習のテーマ

3 年間のテーマ『発信・核・感謝』

今年度のテーマ「～REBUILD & APEAL～」

2 1 年間の取組の概要

月	プロジェクト学習活動内容
4, 5 月	臨時休校
6 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートで安居調査（家族と一緒に話し合う） ・今年度テーマ決め ・ACS(Ago Community Session)の実施
7 月	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の研究グループへのインタビュー（1, 2 年合同）
8 月	<ul style="list-style-type: none"> ・制作活動（得意分野を生かす）
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・ジオラマ制作（安居中学校・自然（山、川、蛭）） ・紙芝居（オシッサマの歴史）ポスター（オシッサマ、蛭、稲）
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・安居地区文化祭に制作物を展示 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin: 5px auto;">My Learning</div>
11 月	<ul style="list-style-type: none"> ・オータムプロジェクト『Project “「シン」STEP UP “』として、 立志式（仮）と職業インタビュー・修学旅行の準備委員会を発足
12 月	<ul style="list-style-type: none"> ・理科で講師依頼した気象予報士、 安居中学校を設計した建築士へのインタビュー ・合唱曲「全力少年」の決定と練習開始 ・旅行会社(修学旅行担当)、保護者へのインタビュー
1 月	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス全体を立志式（仮）の実行委員会に再編成 ・校長へ立志式（仮）企画の説明 ・立志式名称「流星の集い～決意を示し、感謝を伝える～」に決定
2 月	<ul style="list-style-type: none"> ・流星の集い本番に向けて (制作物の準備、学年の決意決定、 個人の振り返りによる「決意と感謝」の執筆) ・流星の集いの実施 ・My Learning に向けてのファシリテーションの実践 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block; margin: 5px auto;">My Learning</div> <div style="margin-left: 20px;">← つなげる</div>
3 月	<ul style="list-style-type: none"> ・進路について考える (技術の授業と連携しての高校調べ、調べた内容のシェアリング、 職業インタビューまとめ等)

① オータムプロジェクト『Project “「シン」STEP UP “』より

「流星の集い～決意を示し、感謝を伝える～」に関する取組

「自分(達)を見つめ直し、将来を見据え、これから成長していく決意を示す」ことを目的として、立志式（仮）・My Learning・進路学習・修学旅行準備を1つのパッケージと考えて2学期以降の取組を行った。

以下、特に、立志式「流星の集い～決意を示し、感謝を伝える～」に関する取組について述べる(教師の関わりについては斜字体で示す)。

(1) 立志式（仮）準備委員会発足、目的と式の概要決定（11月、12月）

準備委員会を中心に立志式（仮）の目的を「①決意を示す、②感謝の気持ちを伝える、そして③成長する」と定めた。また、具体的な内容を決めていくにあたって、学年目標『TRY～太陽のように熱く輝き、流星群のように同じ方向を向き、勇気を持って日々挑戦し成長する～』にも込められている「得意を伸ばし、苦手を克服する」ことを方針として重視していくことにした。

生徒達は、こういった行事や学年の取組などを、前例踏襲せずにゼロから創り上げていくことが初めてであったことから、教師は生徒が進みたい方向に向けてアシストしたり、加速させたりしていく立場をとり、意思決定は生徒が行った。例えば、「先輩への想い」を強く持っている生徒が多いことから、「先輩」を意識した活動になるようにアシストした。先輩がサマープロジェクトで学んだ『目的・目標を明確に定める重要性』を念頭に置いた活動になるように促した。

(2) 合唱曲の選定と練習開始（12月～）

この学年は男子17名女子2名で構成されており、歌うことへの苦手意識があり、ピアノ伴奏ができる生徒がいけないという不利な状況にあったが、「苦手を克服する」活動と捉えて合唱に取り組むことにした。「苦手の克服」で何をすべきかについては議論したが、学校祭で先輩から教えてもらった合唱に取り組むことに意義があるという結論に達した。

この合唱に関しては、他の活動に比べて教師側の介入を多くした。そもそも、苦手な合唱に取り組むこと、生徒側に合唱の指導に関する経験がないことなどが理由として挙げられる。それでも、合唱曲の選定から、アカペラですべきかどうか、楽譜をどう扱うか（結局、伴奏ありの混声三部合唱をアカペラの男声二部合唱に作りかえた）など、教師側の提案に対して、「生徒が意思決定をする」というスタンスは貫いた（選曲の際に「歌詞の意味」と「難易度や音域」のどちらを優先するか、など、細かく意思決定・意思統一をするようにした）。

(3) クラス全体を立志式（仮）の実行委員会に再編成（1月）

コロナウイルスの影響で次年度の修学旅行について数か月前から考えていく必要がなくなったこと、本番も近づき全体の取組にしていきたかったことから、それまでの各準備委員会を解体して、新しく実行委員会に再編成することにした。具体的には、全体の企画を担当する「総括」グループ、合唱指導を担当する「合唱」グループ、各制作物を担当する「決意作成」「冊子作成」の4グループに別れた。

オータムプロジェクト全体の実行委員長や立志式（仮）の実行委員長は、これまであまりリーダー活動をしてこなかった生徒である。彼らの頑張りもまた、「苦手の克服」「挑戦」といえるだろう。それぞれの得意・不得意をカバーし合いながら取り組むことができたように思う。例えば、全体に何かを伝える場合は、委員長が話した後、他のメンバーが補足説明を加えるといった工夫をしていた。このように、リーダーや責任のある立場をなるべく多くの人を経験するというのは年度当初より大切にしてきたことであり、それによって自信をつけてきている生徒も多い。

(4) 立志式名称決定『流星の集い～決意を示し、感謝を伝える～』（1月21日）

準備委員会の段階から、先輩たちのように自分たちなりの会の名称を考えていきたいと考えていた。すべての企画が決定する前に、生徒達がだまかな方向性を校長に説明した際の、内容に即した名称にというアドバイスを受けて、いよいよ正式に決定することとなった。目的に立ち返るという思考から、「決意」や「感謝」が伝わるものが良いということ、学級目標と今年度の学校祭テーマの「∞～1人1人がスターになれ～」との繋がりから、「星」というキーワードを入れたいということで、『流星の集い～決意を示し、感謝を伝える～』となった。

また、「感謝」を伝える会にしたいということで、小学校6年生のときに迷惑をかけ、そしてお世話になった担任の先生に見てもらいたいという思いから、実行委員長が直接電話をしてお呼びすることになった。

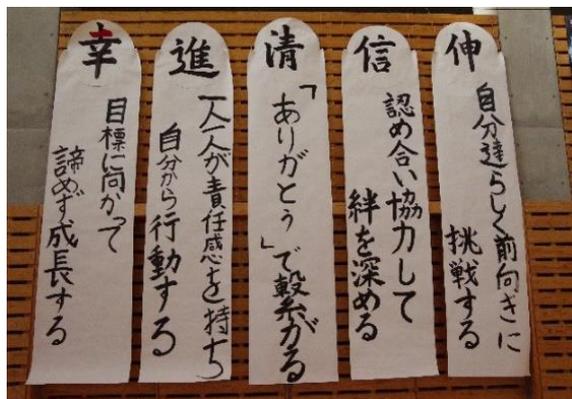
(5) 学年の決意、学年制作物の決定と制作開始（1月22日～）

準備委員会の段階から練り上げてきた学年の決意を正式に決めることになった。その際に、オータムプロジェクト『Project “シン” STEP UP “』に繋がるよう、シンと発音する漢字をそれぞれの決意の前につけることで、オリジナリティーを出したいと考え、まとめていった。

ちなみに一番左の『辛（一画加えると幸）』については、小学校6年生のときの担任の先生が卒業式のときに話して下さった内容からきており、総括グループのメンバーがぜひ入れたいということで採用された。

決意制作のグループが学年の決意の文字の清書や、学年制作物の制作工程に全員が参加すべきだということで、全体での制作が開始した。これらは「得意を伸ばす」活動であり、習字やデザインが得意な生徒が活躍した。

特に、学年制作物では、流星をイメージした背景に伸、信、清、進、辛(→幸)の5文字を配置し、周囲に生徒19人全員の手形を押し、その上に1人1人が執筆した「決意」にちなんだ「〇〇心」を書き入れた。



(6) 「決意と感謝」の執筆（1月下旬～）

生徒全員が「流星の集い」に向けて、これまでの自分の成長を振り返り、これからの決意と周りの人への感謝の気持ちをまとめた。自分自身の決意が読み手や聞き手にきちんと伝わるとともに、学年の決意との繋がり考えながら、何度も校正を重ねた。

この流星の集いの後に My Learning という学びを共有する場が設けられているが、今回の「決意」執筆と繋がる部分も多く、カリキュラムマネジメントの視点から完全に別の活動にならないように留意した。

(7) 式本番（2月12日）

式は、①生徒挨拶、②学年制作物披露、③「学年の決意」発表、④代表生徒による「決意」及び「感謝」発表、⑤学年合唱「全力少年」披露、⑥生徒謝辞の順に行われた。全員が活躍する場を作るということで、式の中では19人全員が話す場面が設けられた。「流星の集い」の名前に込めた思い、歌うことが苦手な生徒も多い学年で、合唱披露を決め、苦手に挑戦し壁を乗り越えようと考えたこと、歌詞に込められた思い、学年制作物ということで19人が自分の手形を押し、そこに名前と心意気を書き込んだこと、学年の決意に込められた意味、家族や先輩、先生への感謝、学年を良くしたいと常に考え行動し続けてきた自分、全員で試行錯誤を繰り返しながら式を作り上げてきた過程等、一人一人の生徒が、自分や学年の思いを話



りきった。時に緊張で言葉につまっても、懸命に思いだし考えながら言葉を紡ぎ出すことができた。「全力少年」の歌詞にあるように、よろめきながらも前に進もうと懸命に頑張ることができた。平日にも関わらず、27人の保護者が我が子や孫の式を見に来てくださったことに心から感謝している。

(8) 「流星の集い」を終えて

全員が集いを振り返って、集いの感想と最高学年に向けての抱負を書いた。また、3年生からメッセージをもらい、うれしそうに読んでいた。

～2年生の感想～

今回の流星の集いを終えてものすごくやり切った感がありました。クラスのみなどここまで全力で何かをやり遂げたのは初めてでした。今回のことは良い思い出にもなったし、これからの自信にもなります。本番は緊張するのも忘れて、ただ夢中で進めていました。クラスのみんが全力で頑張ったのはもちろんですが、それを支えてくれた人のおかげでとても良い式になりました。

僕はこの式を通して自分自身も、クラスとしても成長したと思いました。今日、小6の担任も来ていただきましたが、当時では想像できなかった事ができて、改めて成長したなと思いました。僕は学年の決意の発表をしました。かんでしまったけれど最後までやり切ることができたのでよかったです。クラスでもまた今日からがんばっていきたいです。

～3年生からのメッセージ～

お疲れ様でした。全員が活躍する場があり、誰か一人がいなくても成り立たない式だったと思います。私達も経験しているので分かりますが、準備の時は思い通りにいかないことの連続だったと思います。でもそれを乗り越えることで成長できるし、より一層学年としても絆が深まります。私は今日の合唱を学校祭のときと重ねて見ていました。声量もそうですが、姿勢が変わったなと感じました。それは自分たちしかいなくて、やるしかない状況だったからだと思います。来年1年間自分たちのやれることは全てやり切って後輩にバトンタッチしてください。安居中を任せまぞ！！

特に、3年生からのメッセージで、太字で書いてある部分から分かるように、重視していたポイントが伝わっており、生徒達はうれしかったようである。

(9) 冊子の完成

冊子作成グループのメンバーが中心となって構成・デザイン・素材選び等を行った。冊子の掲載内容を吟味し、生徒全員の決意と制作物、集合写真、家族・小学校の恩師といったお世話になっている人たちからのメッセージを載せた冊子を完成させた。

この冊子と学年制作物に関しては、生徒達の活動がより良いものになるように加速させる立場をとった。ものづくりが得意な生徒も多いが、固定観念に縛られていることもあり、また教師自身が楽しんで制作に加わりたいとも考え、生徒が考えている方向性に沿うように意見を出すようにした。

②成果と課題

*森阪 美文

本プロジェクトは生徒による校長への企画提案で本格的に始まった。校長よりアドバイスをもらい、生徒達自身で集いの名称を考えることで、集いが自分ごととなり、活動意欲につながった。個々の活動については、全員の生徒が班になって意見を出し合い、それを担当グループや実行委員が検討し、担任からアドバイスをもらって練り直し、最終決定していった。1つ1つの事柄を決めるのに時間はかかったが、練り直しの過程で、全体を考えながら、仲間とともに活動を決定し進めていくことができるようになっていった。意見

がなかなか出なかったり、生徒同士の意見のぶつかり合いがあったりして、担任が調整に入ることもあったが、このような経験も、集いの1週間後にあったMy Learningのファシリテーター役に生かされていた。これからも、最高学年に向けて、生徒と教員がともに学び成長していきたい。

＊竹内 恭平

この学年は、入学時から「生徒が主役」が合言葉の中学校生活を送ってきた。しかし、小学校6年生の時の担任の先生が『小学校のときはなかなか1つになることができなかった』と語っているように、自分たちが活動の「主役」であるということを誤解しているように感じることもあった。大変なことや嫌なことを忌避する傾向にあり、本校が掲げる「Agency」のうち、「責任を持って社会変革を実現していく」という部分をもっと育てていきたいと考えていた。生徒たちのこのような性質は自分自身、そして集団に対する肯定感が低いことに起因しており、それゆえに大きな挑戦をしたがらない、成功体験が乏しいがゆえに肯定感が育まれない、という負のスパイラルの中にあったのだと思う。今回は、そんな彼らが個人としても集団としても達成感が感じられるものにしたいという思いで活動を見守り、支えてきた。彼らの自己肯定感の低さやファシリテーションスキルといったレディネスを考えるに、教師としてどのように関わり、支え、励まし、つなげ、ときに引っ張り上げるかの判断が難しかった。また、教師自身が想いを強く持ちすぎ、ゆとりをもって取り組むことができていなかったように思う。様々な部分で成長が感じられ、周りの方たちからも評価をいただき、やって良かったと思う反面、彼らならもっとできるとも思った数か月間だった。この学びを今後の学年や学校全体のプロジェクトに生かしていきたい。

この活動も含めて、この1年間で最も感じるのは、今までリーダーとされてきた生徒以外の生徒も含めて「個」が成長しているということである。不十分ながらも前に出て一生懸命話することができる、自分がすべきことを責任感をもって成し遂げようとする、周りの人に的確に指示を出す・アドバイスをすることができる、周りの人がなかなか行動できないタイミングで前に出ることができる、自分の短所を理解しコントロールしようとする、なかなか勇気が出ないが挑戦したいという気持ちが感じられるといった生徒が増えてきた。この「個」の成長をいかに「集団」の成長につなげていくかが今後の課題といえる。